

「アジアから来た戦争」と北極圏の弓

岡安 光彦*

アジア起源の複合弓や甲冑の出現、防御的集落や要塞の建造、戦傷遺骸の増加などを根拠として、12世紀中頃にベーリング海峡を介して「アジア戦争複合体」が北米北極圏に波及し、戦争を伴うチュールの東方への移住・拡散を促したとする「アジアから来た戦争」論が、アメリカ考古学および人類学において盛んに議論されてきた。しかし、ユーラシアの木質積層弓と、北米北極圏のケーブルバック弓とは全く別物である。ケーブルバック弓は、中石器時代のフラットボウの系譜を引く古式の弓である。対してユーラシア木質積層弓は、匈奴勃興期に内陸ユーラシアで成立したシヤ（弓の両端に取り付けてテコの働きを促す硬い柄）を装着した彎曲複合弓の影響を受け、ユーラシア北縁で成立したより新式の弓である。北米北極圏の「アジアから来た戦争」を、共通の弓の存在を根拠に論ずるのは誤りである。ベーリング海峡周辺に端を発し、北米北極圏へと波及したのは、強いていえば「ベーリング海峡戦争複合体」というべきものである。それと相前後して北米大陸で発生した「アタパスカン戦争複合体」と「ヌミック戦争複合体」とを合わせて、互いに何らかの歴史的な繋がりを持った「北米戦争複合体」とみなすことは可能だろうが、その成立にアジアが関与していたと捉えるのは、明らかに早計である。

キーワード

北米北極圏、ベーリング海峡、アジア戦争複合体、木質積層弓、ケーブルバック弓

目次

- I はじめに
- II 「アジアから来た戦争」または「アジア戦争複合体」
 - 1 20世紀前半の探検や発掘調査とその成果
 - 2 アーネスト・パーチによる「エスキモーの戦争」の再発見
 - 3 パーチの後継者と「アジアから来た戦争」論
- III 北米北極圏とユーラシア北部の複合弓の比較
 - 1 北米北極圏のケーブルバック弓
 - 2 ユーラシア北部の複合弓
 - 3 中石器時代のフラットボウ
 - 4 和弓の成立とユーラシア積層弓
- IV 結論
 - 1 北米大陸の弓と戦争拡大の起源
 - 2 北極圏考古学の新たな展望

* 一般社団法人 PLUSULTRA

I はじめに

AD1150年頃、ベーリング海峡を介して、アジアから北米北極圏に激しい戦争状態が波及した。そうした状況を示す証拠として、アジア起源の複合弓や小札式甲冑など新たな武器・武具がアラスカやアリューシャン列島に出現するとともに、要所々々に防御的集落や要塞が建設され始め、さらには戦傷を受けたとみられる遺骸が顕著に増加することが指摘されている。後述するように、こうした「アジアから来た戦争」という見方に関しては、アメリカ考古学および人類学者の間で、大筋においてコンセンサスが成立しているように思われる (Maschner 2000; Maschner and Mason 2013; Mason 2020)。

しかし、戦争がアジアから波及したというのは、事実だろうか。ハーバート・D・G・マシュナーが唱える (Maschner 2000)、「アジア戦争複合体」がベーリング海峡を超えて北米北極圏を席卷したという仮説に確実な根拠はあるのだろうか。本論の目的は、その問題に、アジアの側から光を当てることにある。具体的には、小札式甲冑とともに「アジアから来た戦争」の根拠として繰り返し言及されてきた「アジア複合弓」に焦点を当て、ユーラシア北部と北米北極圏の資料を比較して、両者の関係を明確にし、それを通して、従来の議論を批判的に検証する。

II 「アジアから来た戦争」または「アジア戦争複合体」

1 20世紀前半の探検や発掘調査とその成果

欧米の考古学者や人類学者が北米北極圏の暴力の起源をアジアに求める際、その根拠として必ず引用するのが、20世紀初頭に記された、ウラジミール・ボゴラスの民族誌『チュクチ』(Bogoras 1904)の記述である。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ベーリング海峡兩岸の人類学的調査を主要目的に、アメリカを代表する人類学者フランツ・ボアズによって組織されたジェサップ北太平洋探検隊 (Jesup North Pacific Expedition / 1897-1902) にロシアから招かれたボゴラスは、いわゆるジェサップ領域 (アジア側はアムール川以北、北米大陸はコロンビア川以北) のなかでも主にベーリング海峡西岸、アジア側の狩猟採集民、シベリア・エスキモー (ユピック) とチュクチの調査に従事した。ボゴラスは後にロシアを離れてニューヨーク

に滞在し、アメリカ自然史博物館の学芸員として『チュクチ』を著し、探検時に調査したベーリング海峡西岸の狩猟採集民についての詳細な記録と鋭い考察を残した。本論との関わりでとくに重要なのが、武装や軍事施設に関する民族誌的記述で、それは今日の欧米研究者がいうところの「アジアから来た戦争」の原典となっている。

ボゴラスが採集し記録した戦争に関わる資料のなかで注目されるのが、ユーラシア大陸東端に住む先住民、コリヤークやチュクチが使用していた骨角製や金属製のスラット・アーマー (小札式甲冑) やアーム・ガード (籠手) である (図1、2)。それらの特徴は一見、東アジアで広く用いられた小札式甲冑に類似している。なかでもボゴラスの注意を引いたのが、チュクチから入手した甲冑で、ボゴラスはこれを先の小札式の籠手とともに日本製と判断し、鉄製の甲冑類が朝鮮人交易商などを介して、中国北部や朝鮮半島、さらに日本列島からシベリアや沿海州、オホーツク海を経て遠くベーリング海峡西岸へと流通していたことを端的

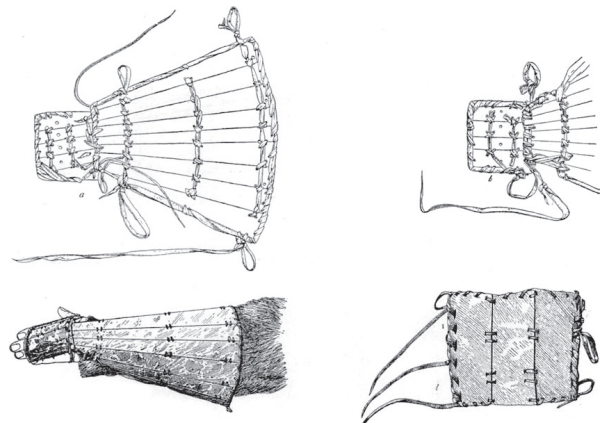


図1 チュクチの小札式籠手 (Bogoras 1904)

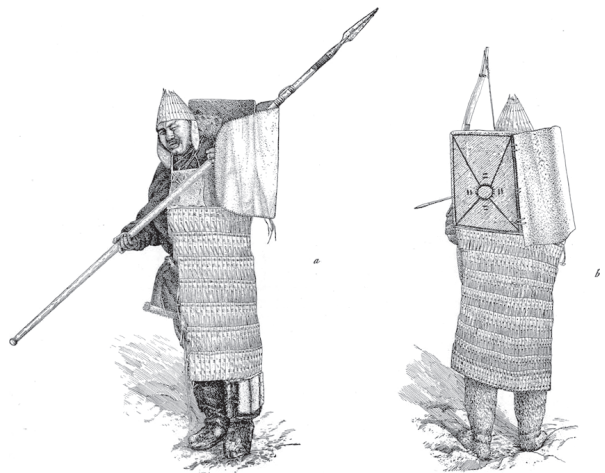


図2 コート形式小札甲冑とユーラシア木質積層弓によるチュクチの武装 (Bogoras 1904)



図3 チュクチ使用甲冑 (Bogoras 1904)

に示す資料であると捉えた(図3)。ボゴラスのこの見解が、今日でも広く踏襲されている。

弓矢や槍は、武器としても狩猟具としても用いることができる。これに対して、甲冑は純粋に対人戦闘のみを目的に多大なコストを投入して製作された「純粋な」武器である。アジアで広く用いられてきた小札式甲冑が、ベーリング海峡兩岸の狩猟採集民の間で使用され始めた事実は、激しい武力抗争が、アジアから北米北極圏に持ち込まれたことを裏付けている。ボゴラスの考察を介して、欧米研究者は、そのような結論に到達し、今日に至っている。

この問題に関しては、アジア側から考察した梶原洋による研究がある(梶原 2009, 2017)。梶原は甲冑の小札を穿孔箇所などの要素から8型式に分類し、日本列島の甲冑と比較して、次のような結論を導いた。日本(本州)では渤海を代表とする大陸との関係が希薄になったあと、AD10~11世紀に独自の大型大鎧が成立した。これに対して、北海道や樺太では、ニブフの鉄製甲冑、樺太アイヌの皮革製甲冑や北海道アイヌの小札式甲冑などに示されるように、コート形式の甲冑が存在することから、中世あるいは近世に至っても、大陸との軍事的結び付きが継続していることが分かる。さらに、ユーラシアの甲冑小札には、全域に分布する共通型式と、中国北部・朝鮮半島・沿海州・日本に分布する東部型式の2種があり、東部型式の起源は沿海州ポリツェ文化以前から認められる骨製小札にあると推

定できる。甲冑小札の素材は骨から鉄に変化したのが、騎馬の風習を取り入れる過程で、東部型式の外重ね式掛甲が生まれた。女真期の沿海州の甲冑には、胴丸甲冑など類似型式が認められるので、奈良、平安期を通じて日本列島の甲冑と何らかの技術的つながりがあった可能性を読み取れる。アムール川流域ではBC 6~4世紀の初期鉄器時代に小札式甲冑が出現するが、その初期には骨製の小札もみられる。中国の史書『三國魏志陳留王本紀』に景元三年(AD262年)の肅慎の貢物として「肅慎國遣使重譯入貢、獻其國弓三十張、長三尺五寸、楛矢長一尺八寸、石弩三百枚、皮骨鐵雜鎧二十領、貂皮四百枚」の記述があり、また『晉書列傳』にも「有石弩、皮骨之甲、檀弓三尺五寸、楛矢長尺有咫」といった記述が認められることから、現在の極東や沿海州の民族(肅慎や挹婁)が皮や骨の甲冑も使用していたことが分かる。チュクチの骨製小札やエスキモーの骨製、セイウチの牙製小札も、ソウル夢村土城出土の百濟初期の骨製小札式甲冑と同様、同系列に属すると考えられるという(梶原 2009, 2017)。

いっぽう、ボゴラスはチュクチの弓についても紹介している。引張力に強いカバノキ系の木材を弓背に、圧縮力に強いマツなど針葉樹系の木材を弓腹に配し、両者を魚類の膠で接着した積層複合弓(two-wood bow / laminated wood bow)である。弓幹の両端には硬いカバノキ材を用いたシヤが装着され、膠で接着した後に動物の腱やカバノキの外皮を巻いて補強している。このようにシヤを装着した積層弓については後で詳しく検討する。

アジア戦争複合体との関係でボゴラスが記載した重要な資料としては、他にチュクチの所有する大型の組み立て式皮革製カヌー(skin boat)や、犬橇がある。いずれも、ネオエスキモーのチュレが、アラスカ西部から出発して、またたく間にグリーンランドまで拡散した際の、強力なツールとなったと考えられているが、それらの採用時期をめぐっては現在でも議論が分かれている(Mason 2020)。

以上のようにボゴラスがベーリング海峡西岸、アジア側の狩猟採集民の民族誌を記した『チュクチ』と並んで、ジェサップ北太平洋探検隊が残した民族誌研究の成果に、カムチャッカ半島周辺で同様の調査に従事したウラジミール・ヨヘルソンの『コリヤーク』がある(Johelson 1905)。ヨヘルソンの記録によれば、カムチャッカ半島に居住するコリヤークも、先のチュクチと全く同様の小札式甲冑と木質積層弓で武装し、自



図4 戦跡に散乱する遺骸 (Rasmussen 1927)

然地形を利用した要害を築いて、いくつかの地域集団に分かれて互いに抗争していたことが分かる。こうしたヨヘルソンによる記録もまた、ボゴラスのそれと並んで、アジアから北米北極圏に武力抗争が波及したという伝統的な見解を、初期の段階から支えてきた。

北米北極圏の北縁に沿って北大西洋と北太平洋を結ぶ北洋航路を、ヨーロッパ人として初めて犬橇で横断したのが、優れた探検家を兼ねたデンマークの民族学者、クヌート・ラスムッセンである。ラスムッセンは7次にわたる「チューレ探検隊」を主導し、イヌイトおよびエスキモー研究の先駆者として多くの民族誌的記録を残した。北米北極圏のネオエスキモー集団に対して、それが妥当だったかどうかはともかく、今日でも広く用いられている「チューレ」という呼称を与えたのもラスムッセンである (Mason 2020)。本論との関係で重要なのは、北米北極圏西部におけるエスキモー集団間の激しい抗争の状況を、白骨が散乱する生々しい戦跡写真などを含めて文書化し、記録に残したことである (Rasmussen 1927、図4)。ラスムッセンの記録と考察は、20世紀後半以降のアーネスト・バーチ等による北米北極圏の戦争研究に継承されることになった (Krupnik 2012, Mason 2012)。

北米北極圏考古学の金字塔として重要な学史的位置を占めるのが、ヘンリー・B・コリンズによる『アラスカ州セントローレンス島の考古学的調査』である (Collins 1937)。1928年から1931年にかけて、スミソニアン博物館が二次にわたって実施した、ベーリング海峡に浮かぶセントローレンス島のエスキモー遺跡で実施された発掘調査についての詳細な報告書で、今日から見れば発掘の内容や方法に限界があるとはいえ、調査状況や出土遺物の多くが詳細な文書と鮮明な写真で記録されており、貴重な情報源となる。後述するように、この報告書の記録によって、オールド・ペーリ



図5 セントローレンス島出土品 (図右下に弓を模した玩具が見える) (Collins 1937)

ングシー・トラディションの段階で、既に今日のエスキモー・ケーブルバック弓と同様の弓が用いられていたことを確認することができる (図5)。オールド・ベーリングシー・トラディションは、BC250～AD400年頃に発生し、AD600～800年頃に全盛期を迎え、AD1300年頃まで続いた文化で、チューレの母体となった集団に関係していると考えられている (Mason 2016)。

本論において重要なのは、コリンズが報告書のなかで進めた様々な考察 (Collins 1937) が、先のボゴラスの論考と並んで、「アジアから来た戦争」論に強い影響を与えてきた点である。コリンズは、セントローレンス島の発掘で出土した骨製の甲冑用小札に着目し、ボゴラスと同様、『三國魏志陳留王本紀』の「肅慎がAD262年に弓、矢、革や骨や鉄で作られた鎧を献じた」記事と関連付けた上で、そのような鉄の知識がシベリア経由で北上し、少量の鉄がベーリング海峡とセントローレンス島に到達した可能性があると記し

ている。さらに7世紀に肅慎と日本との間に何度かの海戦があったことについても触れ、東アジアとベーリング海峡とを結ぶ交易や交流について考察を広げている。なお、ベーリング海峡周辺の骨製小札甲冑に関しては、外部の文化との接触なしに、独立して発生したという考えを残している。

2 アーネスト・バーチによる「エスキモーの戦争」の再発見

第2次世界大戦が終結し20世紀後半に入ると、ライス・ビンフォード (1931~2011) に代表されるプロセス考古学が興隆し、ナチスに利用された考古学への反省もあって、「文化拡散主義」が封印されるとともに、文化はそれぞれの地域の生態系に適応して各個に進化したと捉える思考の枠組みが、考古学者や人類学者の間に浸透した。同時に「狩猟採集民社会に戦争はない」とするテーゼが信奉されるようになり、ヨーロッパ人との接触まで、アメリカ先住民は平和な社会に暮らしていたとする考えが、研究を進める上でのアプリオリな前提となった。いっぽう、20世紀前半までの学史は忘却される傾向にあった。それは北米北極圏のイヌイトあるいはエスキモーをめぐる研究についても同様で、当時のエスキモー研究の権威ロバート・F・スペンサーも、北アラスカのエスキモーに関する有名なモノグラフのなかで、アラスカ北極圏のイヌピアトの間には「戦争のしくみはなかった」と断言する状況にあった (Burch 1991)。

こうした戦後考古学の流れのなかで、「エスキモーの戦争」を再発見したのが、アメリカの人類学者アーネスト・S・バーチである。バーチはアラスカ北西部の小さな村キヴァリナに住み込み、1960年代から1980年代にかけて行った広範なインタビューや記録文書に基づいて、AD1800年頃のアラスカ北西部のイヌピアトの政治経済、人口動態を再構築する研究に従事していたが、人類学的聞き込み調査を進める過程で、平和の民であったはずのエスキモー社会で、かつて激しい武力抗争が恒常的に生じていたのではないかと疑い始め、最終的にはそれを確信するに至った。バーチはこう述べている (Burch 1991)。「私は、ラスムッセンが数10人の遺体がはっきりと見える古い戦場の写真を発表していたことを発見してショックを受けた。以前この資料を何度も読んでいたにもかかわらず、見落としていたからである。「イヌピアトは、確執と戦争を明確に区別していた。戦争の文脈では、火

器戦術と衝撃戦術の違い、火器と衝撃兵器について話している。鎧を着ること、戦線を操ること、矢を放つことなどを話し、ストックヤードや土塁についても話した。要するに、いかなる狩猟民族についても記述されたことのない、洗練された種類の戦争について話していたのだ」。

バーチは、口承に基づく歴史再構築の方法で、19世紀初頭に遡るアラスカ北西部全域の生活や歴史的展開の多くの側面を詳細に再構築したが、友人の人類学者イゴール・クルプニクは「彼は、タイムマシンを使わず、発掘用の移植ゴテを持ち上げることもなく、約200年前の1800年代初頭の北極圏、とくに北アラスカの先住民の生活について語り、書くことができた唯一の人類学者だった」と述懐している (Krupnik 2012)。

バーチによれば、アラスカの先人たちは多数の「ネイション」に分かれた社会を構成し、それぞれ人口的には小さかったが「イスラエルとシリア、あるいはドイツとオーストリアのように、互いに異なる存在だった」。「ネイション」はそれぞれ明確に区切られた領土を支配し、明確に定義された「国民」で構成されていた。18世紀半ばのアラスカの政治地図は、中世ヨーロッパの政治地図を彷彿とさせるものであった。そしてそれらの「ネイション」は、相互に激しい武力抗争を繰り返す、あるいは同盟して共通の敵と戦っていた。戦いの目的は、敵の根絶にあり、実際に多くの村で村民が皆殺しにされ、廃墟と化す状況にあった (Burch 1991)。

3 バーチの後継者と「アジアから来た戦争」論

20世紀も終わろうとする1990年代に入ると、プロセス考古学の退潮とともに「文化拡散主義」への封印が解け始める。その動きの嚆矢となったのが、後に『馬・車輪・言語』(Anthony 2007)を著し、2010年のアメリカ考古学協会賞を受賞した人類学者、デイヴィッド・W・アンソニーによる論文「考古学における移住—赤ん坊と風呂水—」である (Anthony 1990)。アンソニーは「システム志向の考古学者が、移住を否定することで、水と一緒に赤ん坊を捨ててしまっている」と、プロセス考古学を批判するいっぽう、グスタフ・コッシナの移住モデルについて、肯定すべきところは肯定すべきだとして再評価し、ゴードン・チャイルドの業績を讃えて、人類の移住や拡散の問題を考古学研究の視野の内に積極的に取り入れるべきだと訴えた。

先のバーチは、自らが口承に基づく歴史再構築の方法で概念化した「ネイション」を、より具体的に物質文化から検証し、「戦争と同盟」の実体を再構築するのは、「君たち考古学者の役目だ」という「遺言」を残した (Krupnik 2012; Mason 2012)。多くの考古学者がその遺志を受け継ぎ、「エスキモーの戦争」の実体を解明するための作業に取り組み始めた。その結果明らかになってきたのが、戦争の考古学的証拠、すなわち防御施設、集落の特異な占地、埋葬施設における極端な性差、戦傷遺骸、人口動態の急激な変化、武器(短剣・棍棒・弓矢)や武具(盾や甲冑)の出現と増加あるいは拡散などである。そしてその結果、20世紀前半の考古学的・人類学的成果の学史的再評価を含む一連の研究が、はじめに述べたように今世紀に入っ

1999年にコペンハーゲンで開催された学術会議『北極圏の地域性と文化的接触』において、アメリカの考古学者ハーバート・D・G・マシュナーが「破局的変化と地域間の相互作用—南ベーリング海の動的システム—」と題する講演のなかで使用したのが、「アジア戦争複合体」という語の初出である (Maschner 2000)。マシュナーは、AD1150年前後に発生したアジアから北アメリカへの戦争複合体の拡散が、ベーリング海峡に急激な政治的進化と深刻な緊張をもたらし、環境・人口動態・社会組織・生活・貿易・文化などのすべての領域における変化に決定的な影響を与えたとし、戦争複合体の具体的な指標として、アジア起源の複合弓・甲冑・特殊な戦闘鍬・防御集落・要塞の存在などを列挙した。

戦争複合体という用語を用いたのは、マシュナーが初めてだが、ベーリング海峡周辺からアラスカにかけての北極圏で12世紀中頃から長期に亘って蔓延した、先住民間の激烈な戦争状態をめぐる民族誌的、考古学的研究において、戦いの淵源をアジアに求める考えは、プロセス考古学が隆盛を極めた第2次世界大戦後の比較的長い期間を除いて、研究者の間で広く支持されてきた。アラスカ先史文化研究の第一人者、オーウェン・K・メイソンも、ほとんどの東アジア社会がこの時期に「帝国主義の拡大」を経験しており、この戦争複合体が北東アジアから北米に広がったことが、ベーリング海峡地域での一連の急速な政治的発展の舞

台となったと強調している (Mason 1998)。「アジア戦争複合体」は、多くの北米研究者が長きにわたって「アジアから来た戦争」と捉えてきた、北極圏の戦争をめぐる複雑多岐な諸相を、一語で総括的に表現できる、便利で魅力的な概念といえることができるだろう。

以上のように北米考古学や人類学で受け継がれてきた「アジアから来た戦争」論、あるいは「アジア戦争複合体」概念をアジア側から見た場合、それは妥当だといえるだろうか。以下では、その問題を、新旧両大陸の複合弓の比較を通して、検証してみたい。

III 北米北極圏とユーラシア北部の複合弓の比較

北極圏の複合弓には大きく二つの地域的なグループがある。一つは北米北極圏に分布するエスキモーのケーブルバック弓、もう一つはユーラシア北縁に分布するユーラシア積層弓である。両者の間にはどのような関係が認められるのだろうか (図6)。

1 北米北極圏のケーブルバック弓

北米北極圏の弓と矢はドーセット期 (BC500～AD1300年頃) に一度消滅し、その後チュレの登場とともに復活したとされている (Maschner and Mason 2013)。考古学的資料から得られる情報は、1930年代にセントローレンス島で行われた発掘調査で出土した弓を模したとみられる玩具の例 (Collins 1937) などを除けば、ごくわずかしかない。そのため、北米北極圏の弓について詳細を知るためには、ヨーロッパ人との接触以降に採集された、民族学的資料に頼る必要がある。その貴重な情報源となるのが、博物学者のネルソン等が極地探検で収集し、アメリカ国立博物館に所蔵されたエスキモー弓について、アメリカの民族学者マードックが残した報告である。とくにその詳細な図版は、今日でも大いに参考になる (Murdoch 1884)。

エスキモー弓の主体部である弓幹は、針葉樹を扁平な二翼プロペラ形に削り整えた、いわゆるフラットボウである (図7)。扁平な弓幹の形状は、中石器時代から新石器時代にかけて、ユーラシア北西部で使用された、いわゆるホルムガード型の弓に、弓筈部を含めてよく似ている。エスキモー弓では、この扁平な弓幹をトナカイやシカの腱を三編みにしたケーブルで密に緊迫することで、弓背を強化している。本論では、この特殊な複合弓を、英語の名称 (Cable-backed bow)



図6 両大陸北部における弓の分布

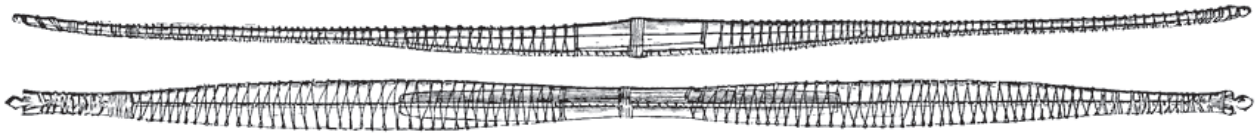


図7 エスキモー・ケーブルバック弓(シヤを持たないフラットボウ)(Murdoch 1884)

をそのまま用いて、ケーブルバック弓と呼ぶことにする。次に述べるユーラシア北部の木質積層弓と異なり、弓幹の両翼にシヤを装着することはない。エスキモー弓としてはこの他に、木材を入手しにくい地域で、トナカイの角から製作した部材をリベットで固定した、骨角製ケーブルバック弓などが使われる場合もあった(Murdoch 1884)。

ケーブルバック弓は、アラスカからグリーンランドまで北米北極圏に広く分布する他、ベーリング海峡を挟んでユーラシア大陸東端にもわずかに分布する。その分布域は、チューレの文化的後継者とされる、今日のエスキモーおよびイヌイットの居住域に基本的に重なる。

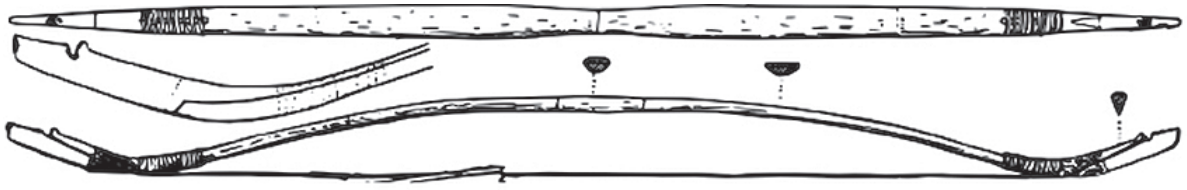
複合弓の一般的な発達史から捉える限り、北米北極圏のケーブルバック弓は、後述するように、シヤを用いない点でユーラシア北部の木質積層弓に比べ、より古い特徴を示し、その形態は中石器時代に起源を持つ単一素材のフラットボウによく似ている。

2 ユーラシア北部の複合弓

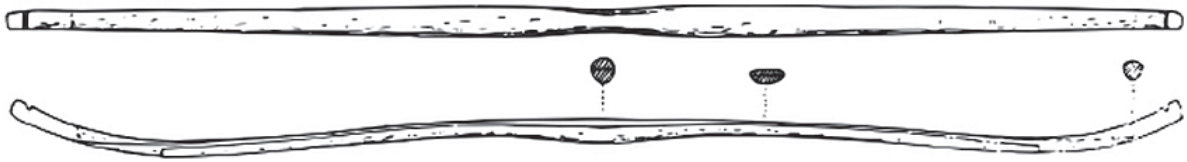
ユーラシア北部の複合弓は、弓腹側に圧縮力に強い針葉樹を、弓背側に引張り力に強いカバノキ系の木材を配し、両者を接着剤で貼り合わせて扁平な弓幹と

し、その両端に硬いカバノキ材の部品であるシヤを装着した、木質積層(ラミネート)弓である(図8)。

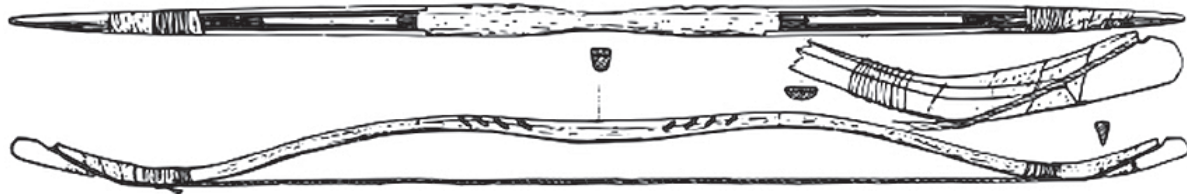
シヤとは弓の両端に配置したテコの働きを促す硬い柄で、ステップの騎馬遊牧民によって発明されたと考えられる(図9)。このシヤの登場をもって、彎弓の開発は基本的に完結し、ウマとともに騎馬遊牧民がその勢力を急速に拡大させていくための原動力となった。シヤのない、例えばイングランド・ロングボウのような単一素材弓では、弓を引けば引くほど、引いた距離に比例してより強い力で弓を引く必要が生じる。これに対して、シヤを持つ弓では、弓弦が引かれシヤに力が伝わると、シヤと弓幹の結節部を支点としてテコの原理が働き、弓幹が容易に湾曲して、弓を均一な力で滑らかに引くことが可能となる。剪定バサミの柄を両手で持って力を加えると、刃部に力が集中し、テコの原理で太い枝でも楽に切り落とせるのと同様である。この硬い柄の部分、アラビア語ではシヤ(siyah)、ハンガリー語ではサルフ(szarv)、フィンランド語ではサルヴィ(sarvi)、トルコ語ではカサン(kasan)と呼ぶ(Maenchen-Helfen 1973)。サルヴィとサルフはいずれも角を意味するが、それはシヤがもともと骨角製の部品だったからである。日本ではシヤを「弓弭」と呼ぶ研究者もいるが(高濱 2010)、シヤを



Kuva 16. Jurakkisamojedilainen jousi.



Kuva 17. Tšeremissiläinen jousi.



Kuva 18. Ostjakkilainen jousi. Vas-jugan.



Kuva 19. Vogulilainen jousi. Sosva.

図8 ユーラシア木質積層弓（両翼にシヤを持つ）(Sirelius 1919)

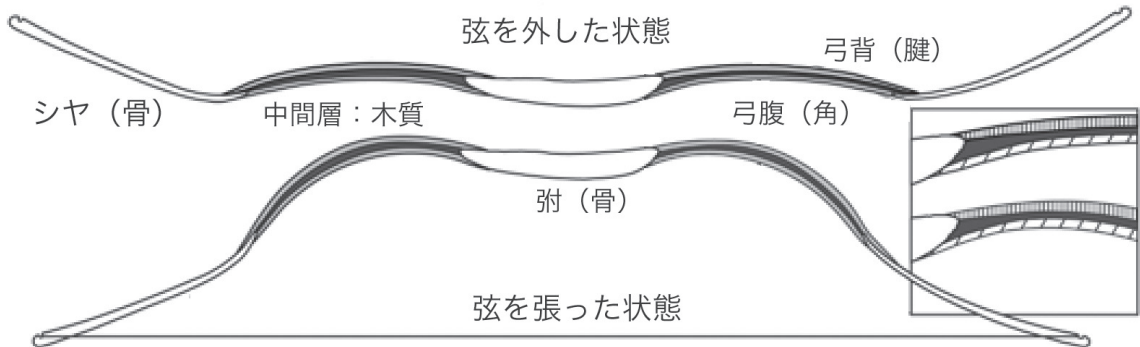


図9 弓幹の両翼にシヤを持つ彎弓（東トルキスタン・ミラン遺跡出土弓をもとにした模式図）

持たない弓の先端部も「弓弭」と呼ぶことが多いので紛らわしい。本論では混乱を避けるため、欧米の論文で一般的に用いられるシヤの語を採る。

ユーラシア北部の木質積層弓は、西に分布するフィン・ウゴル弓と、東に分布するシベリア積層弓の2つのグループに大別することが可能である (Lepola 2015)。両者の外観はよく似ているが、素材や構造がやや異なる。ただし、フィンランド国立博物館の収藏品解説 (The National Museum of Finland online: <https://www.kansallismuseo.fi/en/collections/suomalais-urgilainen-kokoelma>) のように、両グループをシベリア・タイプ複合弓 (Siberian type composite bow) とひとまとめにして捉える場合もある。

フィン・ウゴル弓は、先住民のフィン・ウゴル語族に用いられてきたことから、その名があり、シベリア西部 (オビ川とエニセイ川の間中部から西側) からスカンジナビア半島までの広大な地域に分布している。傾斜地に生育したマツが積雪の重さで屈曲した部位であるマツ圧縮材 (compression wood) の薄板を弓腹に、カバノキ系木材の薄板を弓背に配し、両者を接着して弓幹とした木質積層弓である (Lepola 2015)。

フィン・ウゴル弓の製作過程で用いられる接着剤は、カバノキの樹脂 (このため水に敏感なので防水のために完成後の弓をカバの木の樹皮で被覆する) とする説と (Lepola 2015)、魚類から採った膠とするフィンランド国立博物館の収藏品解説 (The National Museum of Finland online: <https://www.kansallismuseo.fi/en/collections/suomalais-urgilainen-kokoelma>) など2説あるが、本論では後者に従う。

フィン・ウゴル弓は、鉄器時代のスカンジナビアで、気候が徐々に寒くなるにつれて姿を現した。スウェーデン、ノルウェー、フィンランドでは、フィン・ウゴル弓の考古学的発見が9件あるが、ほとんどの出土品は鉄器時代から中世にかけてのものである。マツ圧縮材を素材とする弓幹は、スカンジナビア周辺の湿地や湖で発見されており、フィンランドで発見された最古の考古学的資料は、BC300~200年頃まで遡る (Lepola 2015)。

これに対して、北ユーラシア東部に分布するシベリア積層弓は、多様な種類の木材から作られ、必ずしもマツ圧縮材を用いない。ナナイとオロチは弓にブナを使い、ニブフはトネリコやポプラ、ヤナギを、チュクチは流木を集めて弓を作っていた。中央シベリアのナガサンスの複合弓は、カラマツの根の樹脂性薄板を

何枚か重ねて接着し、シラカバの樹皮で包んだものである。シベリア積層弓の最古の事例は、現時点ではAD1000年の初めに遡るエヴェンクの埋葬地から出土した断片とされる (Lepola 2015)。

ユーラシア東部のシベリア積層弓の材質や構造が多様性に富むことは、この地域の長くて複雑な複合弓発達史を反映していると考えられる。いっぽう、ユーラシア西部のフィン・ウゴル弓は、広範囲に分布するにも関わらず比較的均質である。このことから、ユーラシア・タイガ地帯の多様で原初的な圧縮木単一素材弓や原初的な積層弓が、洗練された積層型フィン・ウゴル弓に先行していた可能性が高い。現時点で得られる考古学的資料では検証できないが、フィン・ウゴル弓は、ユーラシア東部で開発されたシベリア積層弓のプロトタイプが伝播したか、またはその影響のもとにユーラシア西部で開発されものと考えられる (Lepola 2015)。

なお、シベリア積層弓では、両弓端のシヤ基部に弦橋 (string bridge) と呼ばれる突起を付け、弓の弦を最適な位置に保持するストリング・ガイドと弓幹を保護するショックアブソーバーを兼ねた装置とする場合がある。弦橋成立の経緯や時期について、レポラは言及していないが、シヤの導入なども含めて、ユーラシア中央部ステップ地帯の先進的複合弓の影響を受けて採用した部品と考えられる。

考古学的資料が乏しいので、ユーラシア北部の木質積層弓が、どのように発達してきたかは完全には分からないが、複合弓の先進地であるユーラシア内陸乾燥地における弓の発達史を介して、大まかな推定はできる。弓背に腱、弓腹に角、骨製のシヤを弓幹の両翼に配し、膠で接着した動物素材の典型的な彎曲複合弓が成立した時期は、スキタイ期より遅く、匈奴の勃興期と重なる (高濱 2010)。シヤを持つユーラシア積層弓の成立は、匈奴式の完成された複合弓が広く普及して、亜寒帯や寒帯地域の弓がその影響を受けた時期に違いない。後で簡単に触れるように、日本列島における和弓成立の時期も、北ユーラシア周辺における弓文化の一連の変容に関係している可能性がある。

3 中石器時代のフラットボウ

ユーラシア積層弓と異なり、北米北極圏のケーブルバック弓には、弓幹の両翼にシヤを装着しない。弓幹の形状は、中石器時代から新石器時代にかけて用いられた、ホルムガード型の弓 (図10) によく似ている。

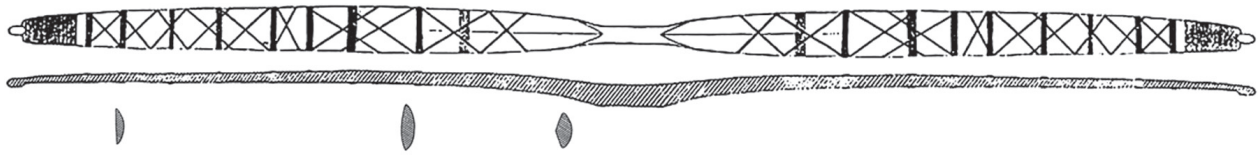


図10 ホルムガード型フラットボウ（イギリス新石器時代メアヒース遺跡出土）（Coles 他 1973）

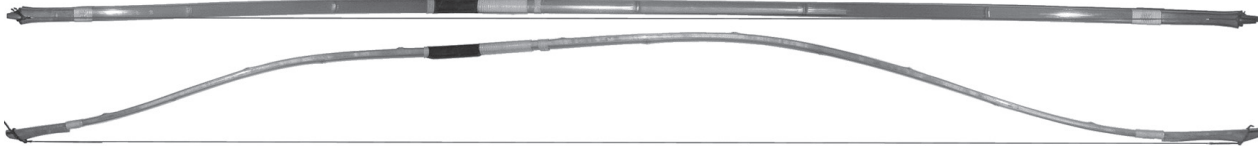


図11 ユーラシア木質積層弓の影響をみてとれる和弓（両弓の「関板」をシヤとみなすこともできる）

考古学的に確実に最古の資料として確認できる弓は、現時点では1944年にデンマークのホルムガード沼沢地で発見された、マグレモーゼ文化期後半、BC7000年頃に比定される全長約170cmの大型のフラットボウである。ニレ材を用い、断面D字形の扁平な弓幹を持ち、中央が括れた二翼プロペラ状の外形に削り整えている。同種のいわゆるホルムガード型のフラットボウは、引き続き新石器時代まで用いられたことが分かっている。ただし新石器時代に入ると、素材がニレからセイヨウイチイに変化する。その理由は、気候変動による周辺植生の変化に伴う弓幹材選択の最適化の結果とされている。なお、新石器時代後半から、フラットボウは丸木の長弓に置換される（Sachers 2009）。

ホルムガード型の弓は、中石器時代から新石器時代（BC 8千年紀～BC 3千年紀）までの間、ヨーロッパ北部で5000年余にわたって使用されたが、調査が進めば、より広大な地域で同種の弓が確認される可能性が高い。そうした予測を裏付ける資料として、BC 1世紀の韓国茶戸里1号墳から出土した、フラットボウ2点がある（大韓民国国立中央博物館 2012）。形状的にはホルムガード弓によく似ているが、地域も時期もかけ離れているので、直接的な系譜関係を議論することは難しい。しかし、中石器時代のヨーロッパと、鉄器時代の極東との間に広がる、ユーラシアの時空間の何処かに、ホルムガード型の弓を使用し続けていた地域が存在していたことを推測する材料にはなる。いずれ中石器時代のフラットボウと繋がる中間的な資料が発見される可能性はあるものの、現時点では、北米北極圏のケーブルバック弓の起源は、オールド・ベーリングシー・トラディション文化まで遡るということ以

外、謎に包まれている。

4 和弓の成立とユーラシア積層弓

竹や木材を弓幹の素材とし、それらを魚から採った膠で接着して製作した和弓は、弥生時代の考古資料に、そのプロトタイプの出現の痕跡が認められるが、確実に古墳時代中期の5世紀代から日本列島で用いられ始めた丸木の長弓である原始和弓をベースとして、その姿形はそのままに、強引ともいえる積層弓化を進めた弓である。持ち手の拵が弓幹の中央ではなく下部に位置する上長下短の構造を含めて、他に例をみない特殊な木質積層弓ということが出来る（岡安 2013, 2015）。

丸木の単一素材弓である原始和弓が、弓背に竹を張り付けた伏竹弓へと改良され、和弓への移行を開始したのは平安時代中期とされる（山田 2010）。和弓には、原始和弓と同様、弓背に弱い外反（裏反り／*reflex*）がある。竹を主材として用いる点は異なるが、弓背の裏反り、植物質を用いた弓幹の積層構造、接着剤として魚から採取した膠を用いる点など、ユーラシア積層弓と共通する点が多い。原始和弓が和弓へと改良される過程で、弓の両端にユーラシア積層弓のシヤに相同する「関板」が付けられるようになることも含めて、平安時代中期（10世紀）における積層弓化には、ユーラシア北東部の影響を認めることができる（図11）。先述したように、日本列島の小札式甲冑は、古墳時代からユーラシア東部、極東地域との密接な関連を持って互いに影響し合いながら発達し、女真期の沿海州にも類似した甲冑が認められるなど、奈良、平安期に至っても、何らかの技術的な繋がりがあったことが指摘されている（梶原 2017）。平安時代中頃における和

弓の成立にも同様の背景があったとしても不思議はない。

では何故、ユーラシア積層弓は完全な形では受容されず、原始和弓の改良（積層弓化とシヤ相同部品の追加）に留まったのだろうか。その理由は、古墳時代中期に騎馬文化が導入された際、騎馬戦闘に最適な動物素材の彎曲複合弓が受容されず、乗馬にはまるで不向きな、丸木の長弓が用いられ続けた理由と同一であったと思われる。

弓を自在に使いこなすためには、長期間の修練を要する。そのため、幼少期から男子に子供用の弓を与え訓練を積ませる民族が多い。その結果、ある民族固有の弓は、その民族固有の身体技能と融合し、新来の弓は受け入れにくくなる。さらに、そうした伝統的な弓は、他の武器や武具とともに、対外戦闘の際には戦士たちにとって極めて重要な敵味方識別のためのエスニック・マーカーとして機能したと思われる。もしそうであれば、原始和弓の姿形を保つことには、特段の意味があったはずである。日本列島の戦士集団が、大陸の彎曲複合弓を受け入れず、上長下短の長弓に頑なに固執したことには、そうした文化的背景があった可能性が考えられる（この問題に関しては、いずれ別の機会に詳しく議論したい）。

北米北極圏のネオエスキモー集団が、長期にわたるアジアとの文化的接触に関わらず、固有のケーブルバック弓を保持し続け、シヤを持つより先進的なユーラシア積層弓を受容しなかったことにも、同様の文化的要因、すなわち戦士集団の身体的戦闘技能と民族固有の武器の一体化、自分たちのエスニック・マーカーたる武器への信頼と忠誠心などの多様な要素が、複雑に関与していたのではないだろうか。

IV 結論

1 北米大陸の弓と戦争拡大の起源

北米北極圏のケーブルバック弓は、北ユーラシアに広く分布する木質積層弓と比較すると、シヤを持たない点において原始的で、中石器時代に出現したフラットボウの特徴を継承した古式の弓である。茶戸里1号墳出土弓の事例から、ユーラシアにはBC 1世紀頃までフラットボウを用いた地域があったので、北米北極圏のケーブルバック弓も、そうした弓の系譜を引く可能性があるが、両者を繋ぐ考古学的資料は現時点ではない。

先述したように、北米北極圏の古い弓について情報を得られる貴重な資料としては、1930年代にベーリング海峡のセントローレンス島で発掘された、大人の弓を精巧に模したとみられる何点かの玩具がある（Collins 1937）。オールド・ベーリングシー・トラディションに所属する遺物であるが、その形状は、今日のエスキモー・ケーブルバック弓に酷似している。オールド・ベーリングシー・トラディションは、チューレに先行し、おそらくその母体となった文化集団である（Mason 2016a, 2016b, 2020）。この資料を基に判断すると、12世紀中頃に開始された、チューレの武力を伴う急速な拡散を支えた弓は、今日のエスキモー・ケーブルバック弓と同種の弓であったと考えることができる。オールド・ベーリングシー・トラディションはBC250～AD450年頃に成立した文化集団と推定されているが、彼らがその当初からケーブルバック弓を所有していたのか、何らかの時点で他の文化集団から受容したのかは不明である。

メイソンによる長年の研究成果に基づくと、チューレの初期の拠点は、セントローレンス島などのベーリング海峡島嶼部とアラスカ半島西岸にあった。彼等の移住・拡散は、アジアからではなく、ベーリング海峡沿岸から開始されたと表現したほうが正確である。移住開始の要因については、考古学者や人類学者の間で未だに意見が別れている。メイソンは近年になって「アジアから来た戦争」に重きを置く当初の自説を部分的に修正し、チューレ社会が捕鯨の盛況による富の蓄積を背景に複雑化し、貧富の差が顕在化していくなかで、増大した貧困層が何かをきっかけに移住・拡散を開始し、社会的矛盾の解消を図ったのではないかという仮説を提示している（Mason 2020）。

もしチューレまたはその母体となった文化集団が、隣接するユーラシアの何れかの文化集団からユーラシア積層弓を受容し、それを武器として東進したのであれば、「アジアから来た戦争」論が、弓という物質文化資料を論拠に成立し、「アジア戦争複合体」概念も妥当なものとなるかもしれない。また、チュクチなどアジア側の民族集団が、先進的なユーラシア積層弓を武器に、北米北極圏の先行社会を薙ぎ倒し、その勢いでグリーンランドまで移住・拡散したというのであれば、同様のことがいえるだろう。しかし、そうしたことは起きなかった。

いっぽう、エスキモー・ケーブルバック弓のなかにも、弓幹の屈曲部を支点としてテコの原理が働き、弓



図12 エスキモーの彎曲複合弓 (CC)

の両端がシヤに類似した機能を持つように作られた例が認められる (図12)。チュクチとの技術交流を介してシヤの原理を理解し、それを自分たちの弓に反映させたのか、独自にシヤに代わるテコの原理の働く弓を開発したのかは不明であるが、ネオエスキモー集団が弓の改良に関心がなかったわけではないことが分かる。

逆にチュクチの側もエスキモー弓の技術を導入し、ユーラシア木質積層弓にケーブルバックを付け加えた、いわばハイブリッド型の弓を用いている。こうした例から、シベリアとアラスカの先住民の間で、弓の製作技術をめぐって相互に交流があったことは確かだが、両地域とも基本的な弓のデザインは踏襲し続けている。

先に述べたように、日本列島の弓が典型的な例だが、戦士集団は武器をめぐって基本的に保守的である。幼児から民族特有の武器で訓練を重ねる結果、武器と身体技能とが一体化するからである。習得の難しい武器の場合ほどその傾向は強まる。チューレの弓がシヤを用いない点で保守的であるいっぽう、それを代替する機能を弓幹に加えた進歩の跡が認められることには、和弓の場合と同様、武器としての近代的な意味での合理性以外の、何らかの文化的ないし心理的な要因が関与していたのではないだろうか。

新旧両大陸北極圏の複合弓を比較検討する限り、12世紀中頃に開始されたチューレないしオールド・ベーリング・シーやプヌクなどの文化集団、すなわちネオエスキモーの東方への移住・拡散をもって、「アジアから来た戦争」や「アジア戦争複合体」を論じることには無理がある。「戦争複合体」という折角の概念を活かすのであれば、実体に即して「ベーリング海戦争複合体」の語を用いるのが妥当と思われる。実際、先

述したように、北米北極圏の暴力をめぐって研究を蓄積してきたメイソンも、チューレの本来の活動拠点は、チュコト半島の東端からアラスカ北西部に広がるベーリング海峡沿岸地域にあり、戦乱はそこから東方へと拡大したと捉えている (Mason 2020)。

北米大陸では、この「ベーリング海峡戦争複合体」の発生と時期を前後して、アラスカ内陸部からカナダにかけて居住していたアタパスカン (またはアタパスカン) が、突如として南方への移住・拡散を開始し、行く手を阻む先住民 (ファースト・ピープル) と抗争を繰り返しながら、最終的には現在のメキシコ北部まで到達し、隣接集団からアパッチ (敵) の名で恐れられる好戦的部族社会をいくつかの地域で成立させ、プエブロ文化崩壊の引き金になった可能性のあることが知られている (Paper 1993; Lambert 2002; Wilson 2011)。いっぽう、アタパスカン諸族の話す Na-dene 語が、遠くエニセイ川流域に居住する先住民ケトの話すエニセイ語と近縁関係にあることが最新の言語学的成果として確認された結果 (Vajda 2008)、彼等がアジアからいつどのようにしてアラスカ内陸部へと移住してきたのかという問題が、言語学や人類学、考古学、さらに遺伝子学などを貫いた大きな論争の焦点となっている (Ives 2010; Diamond 2011)。

アタパスカンは、動物の角と腱と木質とを膠で張り合わせた強力な複合弓であるホーンボウ (角弓) を武器とすることで、周囲の敵対的な集団に対して軍事的に圧倒的な優位に立ったことが知られている (Paper 1993; Wilson 2011)。弓の特徴が、ユーラシア乾燥地帯の彎曲複合弓と似ていることから、先の言語学的近縁関係も踏まえて、アタパスカンがアジアからベーリング海峡を越えて北米大陸に移住した際に帯同した弓であるとする見解もある (Paper 1993, Wilson 2011)。いっぽうマシュナーは、強力な複合弓の存在も含めて、先の「アジア戦争複合体」の北米大陸への巨大な拡散の一翼をなすものとして、アタパスカンによる軍事力に依拠した急速な移住と拡散を捉えている (Maschner 2008)。

しかし、いずれ別稿で詳しく検証するが、アタパスカンのホーンボウもまた、エスキモー・ケーブルバック弓と同様、正確な意味でのシヤを持たず、ユーラシア乾燥地帯の完成された複合弓とは似て非なる弓である。強いてユーラシアの弓と比較するなら、動物の角を弓幹の両翼に配した特徴が、シヤが成立する直前の時期に用いられたスキタイ期のシグマ型複合弓 (高濱

2010)によく似ている。

マシュナーは、チュールとアタパスカンそれぞれの戦乱の拡散を、ひとまとめに東半球への「アジア戦争複合体」の波及と捉えている(Maschner 2008)。確かに二つの動乱は相前後する時期に発生しているし、地理的にも接触しているから、何らかの繋がりがあっても不思議はない。しかし両者いずれとも「アジアから来た戦争」として捉えるのは難しい。むしろそれぞれ「ベーリング海戦争複合体」と「アタパスカン戦争複合体」という相対的に独立した、しかし何らかの歴史的な繋がりのある二つの動乱として捉え、どのような相互関係にあったのかという問題として考察していくのが妥当であると思われる。

これに関連して、北米大陸にはもう一つ、武力を背景とした移住・拡散を伴う「戦争複合体」が発生している。アタパスカン南侵の時期に、それと相前後して勃発した、ヌミックによる武力を伴う大規模な移住・拡散である。ヌミックは北米大陸南部に分布するユト・アステカ語族の一分派で、ショショーニ(スネーク・インディアン)、コマンチ、バイユートなどの諸族によって構成されていた。ヌミック諸族の軍事的拡散がいつ、どうして開始されたかは明確ではないが、先のアタパスカンの勢力拡大とその多くの時期が重なり、両者は強い敵対関係にあった。その際、ヌミックとアタパスカンの闘争は拮抗関係にあるか、むしろヌミックが軍事的に圧倒していた(Sutton 2014)。

アラスカでは、ロシアの捕鯨船がやって来るころになっても、エスキモー同士の戦いが未だに続いていた(Burch 1991)。スペイン人が侵略を開始した頃、ヌミックとアタパスカンは北米南西部で激しい抗争の只中であつた。これにスペイン人が介入するなかで、はじめにヌミックが、ついでアタパスカンが馬と銃を知ることとなり、彼等北米先住民の戦いにさらにヨーロッパ人が加わって、抜き差しならない三つ巴の戦いが開始された(Sutton 2014)。要するに、北米大陸では、12世紀にネオエスキモーの侵攻が始まって以来、第2千年紀の大半を通して戦争が絶えなかったのである。その端緒はベーリング海峡周辺で開始された紛争にあるが、それに東アジアの戦争が関与していたという明確な考古学的根拠は、少なくとも現時点では認められない。繰り返す述べるように、戦争はアジアから来たのではなく、ベーリング海周辺で独自に始まったと考えるべきである。

2 北極圏考古学の新たな展望

北米考古学および人類学において、20世紀前半の学説を基に継承されてきた「アジアから来た戦争」論に代わるものとして、ユーラシア北部と北米北極圏との歴史的な関係を考古資料から実証的に解明していくための、より精密な研究が新たに展開しつつある。

例えばビクトール・M・ディアコノフ等は、アジア北東部からアラスカにかけての初期金属文化に関連する資料を広くレビューした上で、次のような見解を示している。冶金生産地の発見例やその他の痕跡から、ユーラシア北部の青銅と鉄の冶金技術は、主にレナ川沿いから極北東部に向かってタイミル半島に最初に普及したことが分かる。BC 8世紀からAD 5世紀にかけて、ヤクートでは青銅器の鑄造所が発達したことに伴い、鉄の精錬術も習得され、初期鉄器時代の文化が広まった。チュコトカへの冶金技術の普及は、アムゲマ川で発見されたバーリンやアウルの鑄型で確認されているが、金属は第1千年紀の間は非常に希少で、ほとんど取り引きされていなかった。鉄器の発見も非常に限られたものである。初期鉄器時代の遺跡はレナ川の下流域に存在するが、製鉄業はヤクートの領域以北には決して延びなかった。ベーリング海峡を越えて鉄製品がアラスカに出現するのは非常に遅れる。金属はチュコトカからオールド・ベーリング・シーやブヌクなどネオエスキモーの先祖を経由してアラスカに伝えられるようになったが、アラスカ自体には青銅や鉄の自立した冶金技術は存在しなかった。鉄がアラスカに現れたのはAD1000年代後半で、11世紀までには、シベリアからの鉄が、チュクチ海に沿ったルートと、オホーツク海に沿ったもう一つの南のルートの2つの経路のいずれかを介して定常的にアラスカに持ち込まれていた。このルートを利用して、当時冶金の中心地の一つであった沿海州で生産された鉄が中継されていた可能性もある。以上のような北東アジアからアラスカへの金属の拡散は、レナ川流域、極北東部、チュコトカの間で永続的で持続的なつながりがあったことを示している(Dyakonov et al. 2020)。

またアイリーン・コリガンは、AD1000年頃からAD1400~1500年頃までの北米北極圏のネオエスキモー文化であるチュールの鉄利用について、これまで限られた地理的スケールで行われてきた研究を統合して汎北極圏な視点のもとに精査した上で、次のような見解を示している(Colligan 2017)。実験考古学的所見では、海獣の牙やその他の硬い素材を切るには、鉄や銅

の方がより効果的であるが、石や齧歯類の歯など伝統的な素材も使用されていた。チューレは鉄を入手できる時には鉄を使用した。その供給量は限られており、ヨーロッパ人との接触前の時代には不確かなものであった。金属製の道具は小さく、紛失や破損の危険性がない状況で使用するために作られた。グリーンランドの後期ドーセットやチューレは、地元で鉄供給源（隕鉄）を持ち、相対的に多くの鉄を利用することができた。そのことから、チューレの東方への拡散の動機を、そうした東部の鉄資源を求めての移住あるいは商業活動とみなす見解もある。しかしグリーンランドの隕鉄と同成分の鉄製品が西部で発見された事例はない（Colligan 2017, Mason 2020）。

こうした新しい研究は、本論で示した両大陸北極圏の弓の比較研究から導かれる結論と同様に、ベーリング海峡周辺で開始された戦争の起源を、安直に「アジア起源の暴力」に求める議論には問題があること、そのいっぽう、ユーラシアと北米北極圏とは、多様な歴史的関係がもつれた糸のように複雑に絡み合っていており、それらの消えかかった見えにくい痕跡についての実証的な解明の蓄積と、それをめぐる丁寧な解釈が求められていることを示している。

シヤを持つユーラシア北部の木質積層弓の分布圏は、ユーラシア大陸北部におけるトナカイ放牧民の居住域の広がりとはほぼ重なる。トナカイ放牧文化とユーラシア木質積層弓の間には、何らかの繋がりがあるに違いない。いっぽう、トナカイ放牧文化の拡散は、ユーラシア大陸東端のチュコト半島において、北方海洋適応を遂げたエスキモーの「くさび」に完全に阻止され、北米大陸には広まらなかった（北米にトナカイの放牧が広まるのはヨーロッパ人との接触以降である）（Fitzhugh 2010）。シヤを持たない点でユーラシア木質積層弓より古式の様相を示すエスキモー・ケーブルバック弓の起源は、現時点では不明である。その解明は、エスキモーの起源という、より大きな謎を解くための、一つの重要な鍵となるに違いない。

謝辞

本研究は、文部科学省・科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類学：文明創出メカニズムの解明」A03班（JP19H05734）「集団の複合化と戦争」の助成による。本稿は、A03班研究会において発表した内容をもとにしているが、匿名の2名の査読者の詳細にわたるコメントによって大きく修正・改善された。深く御礼申し上げる。

参考文献

（日本語文献）

岡安光彦

2013 「古代長弓の系譜」『日本考古学』35: 47-58。

2015 「原始和弓の起源」『日本考古学』39: 31-52。

梶原 洋

2009 「小札考—ユーラシアからみた小札鎧の系譜—」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 年報』1: 57-80。

2018 「小札後考—小札から見た大鎧の成立についての試論—」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 年報』9: 49-57。

高濱 秀

2010 「中央ユーラシアの複合弓—匈奴勃興以前の草原地帯東部を中心として—」『金沢大学考古学紀要』31: 31-43。

山田奨治

2010 「狩猟から武器へ—弓矢の変遷—」『弓具の雑学事典』日本武道学会・弓道専門分科会（編）、pp. 22-23、スキージャーナル。

（外国語文献）

Bogoras, Waldemar

1904 *The Chukchee* (Memoirs of the American Museum of Natural History 7). Leiden: Brill Publishers.

Burch, Jr, Ernest S.

1991 From Skeptic to Believer: The Making of an Oral Historian. *Alaska History* (6) 1: 1-11.

Colligan, Eileen M.

2017 Thule Iron Use in the Pre-contact Arctic. CUNY Academic Works, the City University of New York. https://academicworks.cuny.edu/gc_etds/2342.

Collins, Henry B. Jr

1937 Archaeology of St. Lawrence Island, Alaska. *Smithsonian Miscellaneous Collections* 96(1): 1-431.

Cooper, H. Kory and Bowen, Gabriel J.

2013 Metal Armor from St. Lawrence Island. *Arctic Anthropology* 50(1): 1-19.

大韓民国国立中央博物館

2012 『昌原茶戸里遺蹟 1～7次発掘調査総合報告書』ソウル：国立中央博物館。

Darwent, John and Christyann M. Darwent

2014 Scales of Violence across the North American Arctic. In *Violence and Warfare among Hunter-Gatherers*, Mark W. Allen and Terry L. Jones (eds.), pp. 182-203. London: Routledge.

Diamond, Jared

2011 Deep Relationships Between Languages, *Nature* Vol. 476, pp. 291-292. London: Nature Publishing Group.

- Dyakonov, Viktor M., Pestereva, Kunney A., Stepanov, Alexander D. & Mason, Owen K.
- 2019 The Spread of Metal and Metal Production Technology in the Far Northeast and Alaska over the Second Millennium BC to the First Millennium AD, *World Archaeology* 51(3): 355–381. Institute of Humanities Studies and Problems of Indigenous People of the North, Siberian Branch of the Russian Academy of Sciences, pp. 1–27.
- Fitzhugh, William W.
- 2010 Arctic Cultures and Global Theory: Historical Tracks along the Circumpolar Road. In *A Circumpolar Reappraisal: The Legacy of Gutorm Gjessing (1906–1979)*, Proceedings of an International Conference held in Trondheim, Norway, 10th–12th October 2008, arranged by the Institute of Archaeology and Religious Studies, and the SAK department of the Museum of Natural History and Archaeology of the Norwegian University of Science and Technology (NTNU). Christer Westerdahl (ed.), pp. 87–109. Oxford: Archaeopress.
- Ives, John W.
- 2010 Dene-Yeneseian, Migration, and Prehistory. *Anthropological Papers of the University of Alaska, New Series* 5(Special Issue, The Dene-Yeneseian Hypothesis), J. Karie and B. Potter (eds.), pp. 324–334.
- Jochelson, Waldemar
- 1905 *The Koryak* (Memoirs of the American Museum of Natural History 6). Leiden: Brill Publishers.
- Coles, J. M., Hibbert, F. A. & Orme, B. J.
- 1973 Prehistoric Roads and Tracks in Somerset: 3. The Sweet Track. Proceedings of the Prehistoric Society 39. 256–294.
- Krupnik, Igor
- 2012 The 50-Year Arctic Career of Ernest S. Burch, Jr.: A Personal Ethnohistory, 1960–2010, *Arctic Anthropology* 49(2): 10–28.
- Lambert, Patricia Marie
- 2002 The Archaeology of War: A North American Perspective, *Journal of Archaeological Research* 10(3): 207–241.
- Maenchen-Helfen, Otto J.
- 1973 *The World of the Huns: Studies in Their History and Culture*, edited by Max Knight. Berkeley and Los Angeles, CA; London: University of California Press.
- Maschner, Herbert D. G.
- 2000 Catastrophic Change and Regional Interaction: The Southern Bering Sea in a Dynamic World System, In *Identities and Cultural Contacts in the Arctic, Proceedings from a Conference at the Danish National Museum, Copenhagen November 30 to December 2 1999*. Martin Appelt, Joel Berglund, Hans Christian Gulløv (eds.), pp. 252–265. Copenhagen: The Danish National Museum & Danish Polar Center.
- Maschner, Herbert D. G. and James Jordan
- 2008 Catastrophic Events and Punctuated Culture Change: The Southern Bering Sea and North Pacific in a Dynamic Global System, In *Time and Change: Archaeological and Anthropological Perspectives on the Long-Term in Hunter-Gatherer Societies*. Dimitra Papagianni, Robert Layton and Herbert Maschner (eds.).
- Maschner, Herbert D. G. and Owen K. Mason
- 2013 The Bow and Arrow in Northern North America, *Evolutionary Anthropology* 22(3): 133–138.
- Mason, Owen K.
- 1998 The Contest between the Ipiutak, Old Bering Sea, and Birnirk Polities and the Origin of Whaling during the First Millennium AD along Bering Strait, *Journal of Anthropological Archaeology* 17(1): 19–51.
- 2012 Memories of Warfare: Archaeology and Oral History in Assessing the Conflict and Alliance Model of Ernest S. Burch, *Arctic Anthropology* 49(2): 72–93.
- 2016a Thule Origins in the Old Bering Sea Culture: The Interrelationship of Punuk and Birnirk Cultures. In *The Oxford Handbook of the Prehistoric Arctic*. T. Max Friesen and Owen K. Mason (eds.), pp. 1–28. Oxford: Oxford University Press.
- 2016b The Old Bering Sea Florescence about Bering Strait. In *The Oxford Handbook of the Prehistoric Arctic*. T. Max Friesen and Owen K. Mason (eds.), pp. 417–442. Oxford: Oxford University Press.
- 2020 The Thule Migrations as an Analog for the Early Peopling of the Americas: Evaluating Scenarios of Overkill, Trade, Climate Forcing, and Scalar Stress, *Paleo-America: A Journal of Early Human Migration and Dispersal* 6(4): 308–356.
- Murdoch, John
- 1884 A Study of the Eskimo Bows in the U. S. National Museum. In *Report of the United States National Museum for the year 1884* (the Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution for the year 1884), pp. 307–316, Washington: the United States National Museum.
- Paper, Jordan
- 1993 A Material Case for a Late Bering Strait Crossing: Coincident with Pre-Columbian Trans-Pacific Crossings, *Sino-Platonic Papers* 39: 1–17.
- Rasmussen, Knud
- 1927 *Across Arctic America—Narrative of the Fifth Thule Expedition*. Santa Barbara: Greenwood Publishing Group.

Sachers, Jan H.

- 2009 Mesolithic Bows from Denmark and Northern Europe. In *Study of Structures, Materials & Manufacturing Processes of World Traditional Bows & Arrows*, Lee, Noh-Shin (eds.), pp. 155–180. Cheonan.

Sutton, Mark Q.

- 2014 Warfare and Expansion: An Ethnohistoric Perspective on the Numic Spread. In *Violence and Warfare among Hunter-Gatherers*, Mark W. Allen and Terry L. Jones (eds.), pp. 149–167. London: Routledge.

Vajda, Edward J

- 2008 A Siberian link with Na-Dene languages. Dene-Yeniseic Symposium, Fairbanks; Ed Vajda Draft March, pp. 1–60. the University of Alaska Fairbanks. <https://uaf.edu/anlc/docs/dy2008summary.pdf>.

Wilson, Joseph Andrew Park

- 2011 Material Cultural Correlates of the Athapaskan Expansion: A Cross-Disciplinary Approach. Ph. D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Florida.

The “War from Asia” and the Arctic Bow

Mitsuhiko OKAYASU*

The “war from Asia” argument which posits that the “Asian War Complex” spilled over into the North American Arctic via the Bering Strait in the 12th century, thereby prompting the migration and expansion of the Thule peoples eastward, has been actively discussed in American archaeology and anthropology. This discussion is attributable to the appearance of composite bows and armor of Asian origin, the construction of defensive settlements and fortifications, and the increase in the remains of those wounded in warfare.

However, the Eurasian wood-laminated bow is quite different from the cable-backed-bow of the North American Arctic. The cable-backed bow is an archaic bow that draws its lineage from the Mesolithic flat bows. In contrast, the Eurasian wood-laminated bow is a newer type of bow that originated in the northern fringes of Eurasia, influenced by the sophisticated compound bow with a *siyah* (a hard handle attached to both ends of the bow that was first used in inland Eurasia during the rise of the Xiongnu tribal confederation).

There may be insufficient evidence to conclude that the “war from Asia” in the context of the North American Arctic is based on the existence of composite bows. In fact, Asia had little impact on those historical complexes.

What originated in the Bering Strait and spilled over into the North American Arctic was not the “Asian War Complex”, but the “Bering War Complex”. At about the same time, the Athapaskan War Complex” and the “Numic War Complex”, both of which existed on the North American continent, can be seen as constituting the “North American War Complex”, which has a historical connection to the “North American War Complex”. Asia did not have a significant influence on those historical complexes.

Keywords

North American Arctic, Bering Sea, Asian war complex, Wood-laminated bow, Cable-backed bow

* PLUSULTRA JAPAN